
武装神姫～人と機械の恋物語～

焰の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫〜人と機械の恋物語〜

【Nコード】

N3616BA

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

神姫、彼女達は全身15センチの人型ロボット、そんな彼女達に武装をさせて戦わせる、そんな彼女達を人々はこう呼んだ、武装神姫と・・・。

第0話 序章の序章

神姫、それは現代の社会ではある意味欠かせないもの。

全身は15センチほどの人型ロボット、だが、『彼女』たちにも心があり、悲しみや楽しさや、嬉しさや喜びが存在する。

現代社会のパートナーのような存在だ。

彼女達はマスターに非常に忠実で、マスターも彼女達のことを愛している。

そして、そんなマスターを補佐するのが神姫の役目。

だからたがいに信頼しあつてからこそ、神姫との相性はよくなる

そして、そんな彼女達に好みの武器や装甲を装備させて

戦わせる、それを人間はこう呼んだ、『武装神姫』と。

そして今日もまた、どこかで神姫は戦っている。

名誉のために、勝利のために、あるいはただの自己満足のために・・・。

第0話 序章の序章（後書き）

はい〜どうも、オタクで二ー・ー・ートなラビです。

いや、もう高校1年生でもうすぐ2年生なんだけどね

オタクってねあ面白いぜ、いろんな意味で！

とおー！いうわけで始めました武装神姫の別バージョンー！！

今回はどちらかといえばサブタイトルでわかるようにあまーーり戦いは出さないようにしたいなーなーーんておもってるんだけど・

・

たぶん無理ですー！いまいつちやいますー！たぶんバッキバキに戦わせちやいますww

いや、恋愛要素はもちろん入れるんでー！たぶんキャストは今書いてる奴と

キャラクターは同じかもしれないよ、使ってる神姫が違うだけでww

つつーことでー！これと呼んでくれた方は評価とお気に入り登録してくれたら

すっごく嬉しいなー！！

キャラクターデザイン（前書き）

はいはい、今回は前書きを書かせてもらっね

今回はちょーっと面白そうだなーと思い！

キャラクターにこんな人が声してくれたら嬉しいな！

なんつーことから勝手な空想でキャラクターに声優をつけてみました！www

もちろん本編ではあまり重要じゃないのでお気になさらずに

いや、ホント関係ないからね！？間違えてこれに対しての批判とかは辞めてよ！？

キャラクターデザイン

蒼神 恭Cあおがみ きょうV：宮野真守

常にヘラヘラしている神姫ラブな高校一年生、これといった特技は無いが

常時笑っていられるある意味異常者、学力はバカという部類で

性格はお人好し、のわりにはドS、神姫のハルナをかなり好んでおりある種の変態と思われる、本人は全く気にしていないが自覚はある、

ある事件をさかいに次々とおかしな事件に襲われていく不幸な主人公その1

咲神 拓樹Cさきがみ ひろきV：山口勝平

恭の友人、ひろきだからロキと彼に呼ばれている。

性格はおおらか・・・な変態、しかし人当たりがよく彼を嫌うものはいない。

彼もまた神姫ラブな性格をしており高校に入学して恭介と出会う。

変態な上にドMらしく恭との内面上の相性は悪い、しかし決めたことを

やり遂げる性格はたとえそれが変態行為でも正しい行為でも曲げることは無い。

主人公その2

城野 沙織Cじょうの さおりV：ゆかな

自称『天才発明家』のドジ眼鏡、拓樹や恭達の神姫の武装は彼女が作っている

恭に入学当初から思いを寄せているが本人は自覚なし。

彼女もまた神姫をもっていて開発のサポートをしている神姫を大切にしている。

が、彼女は『武装』面では天才だが『その他』の分野になったら殺人的な発明をすることがあり、その被害となっているのが主人公の二人。

輪廻 りんね 瑠璃CV：花澤香菜

内気な女の子、滅多に話すことがなく

あまり周囲とも関わらないので浮いており、いじめられていた。

神姫はマイというツガル型で彼女の心の友とも言える存在。

恭達とはある事件をさかいに仲良くなる。

鮫哀 さめあい 卓CV：藤原啓治

主人公達が通う学校の教師、性格は最低最悪で

教師という立場を傘に女子生徒に関係をせまるなど

嫌な噂が絶えない、神姫を道具としか思っていないことから

主人公等と衝突するときもある。

一菅 ひとすが 良太CV：浪川大輔

性格は鮫哀と似ていて神姫を道具としか思っていない。

同じ生徒という立場にいるので主人公等とはよくもめる、固定の神姫がおらず、なにかしらの自慢をしたがる。

井豪 いこう 陵哉 りょうざ C V：神谷浩史

中学時代の恭の友人でよく彼をいじる。

性格は温厚だけどやっぱRS、だけど友達思いなところもあり主人公等は信頼している、学校は違うが恭のはからい？で拓樹とも面識があり、たがいに友人関係を築いている。

倉澤 くらさわ 圭 けい C V：小西克幸

中学時代の恭の友人、彼もまた恭をよくいじる。

性格は言葉よりグーが出るタイプで恭を軽くだがよく殴る、だが神姫はかなり愛しており愛用はハウリン型。

桜庭 さくらへい 桜 おひ C V：日笠陽子

とある出来事により拓樹に思いを寄せるようになった

クラスメイト、神姫はストラーフでクラス委員を務めている。

クラスの評判はとてもよく、なぜか拓樹の前だと甘えん坊のようになる。

ハルナ アーンヴァルMK2 C V：阿澄佳奈

恭の神姫、マスターラブな性格をしているが

それを表現するのが若干苦手、武器はあまり大型を好まず
メインは小回りの効く武器が多い、感情が豊かで甘えるときはもの
すごく甘える。

シャーリー アーク型 CV：堀江由衣

拓樹の神姫、マスターのことを第一に考えるが状況を面白がる面も・
・。
戦闘スタイルは攻め、というより特攻に近く、大型の武器を主力に
している。

マイ ツガル型 CV：釘宮理恵

瑠璃の神姫、瑠璃の心の友であり彼女もまた瑠璃を大事に思う
その反面普通の友達も出来るように尽力している面もある。
戦闘スタイルは砲撃、遠距離パワー系を好んで使う。

スイッチ ストラீフMK2 CV：芽原実里

桜の神姫、彼女の重要な補佐役でありしっかりしている。
メイン武装はミサイルなどのサポート系列だが仲間に対する誤射が
多い

リン ハウリン型 CV：喜多村英梨

圭の神姫、マスターをかなり思う性格で忠実、バトルスタイルは

多彩でメインがない。

アル アルトレーネ型 CV：中島愛

沙織の神姫、アルトレーネだからアルと、とても単純な名前だがアル本人は気に入っており彼女の研究の補佐をする、だがやはりマスター同様ドジっ娘でとんでもない結果を生むこともある。

クラウド エウクランテ型 CV：加藤英美里

陵哉の神姫、マスターに忠実で戦闘スタイルは奇襲が得意、上空から爆弾を落すなど誘導も得意とする。

キャラクターデザイン（後書き）

はい！終了！！いや、神姫自体はゲームで採用されている方々で
キャラクターはこのキャラならこつというのがいいなーって思いまし
たはい
すいません！

なんか個人的に面白そうという理由で漬けましたスイマセン

第1話 通り魔

<ぴぴぴぴ>

目覚ましが、俺の眠りを妨げる、俺はその目覚ましのスイッチを消す

「ふうゝ・・・」

再び布団にもぐる俺、蒼神 恭は、ある意味変わっている性格、もちろんそれを自覚してる上で直すつもりは無い。

だって物にだって心はあるだろ？

「ご主人様？おきてくださいいゝ学校遅刻しますよ？」

そして、俺の心の癒しが声をかけてくれた。

「ははは、何を言う、時間ならマダたつぷりと・・・」

「あと五分でいつも家を出る時間ですよ？」

「・・・・・・」

布団からそろゝっとケータイを取り出し、中を確認、液晶には普段家を出る五分前の時間6:25・・・

「うわあああああ！！！！」

急いで布団を飛び出す、そんで着替える

（嘘だろ！？なんでこんな時間に！？！？）

「は、ハルナあゝ、ちゃんと起こしてくれよゝ」

「起こしましたよ、ご主人様がずーっと寝てたんです」

「そ、そんなあゝ・・・」

急いで着替えて教科書を全て鞆に詰め込む、コートを着て外に出る。

「え！？ちょ、ご主人様！？朝食は・・・」

「近くで何か買う！ハルナ、いくよ！！」

俺は自分の補佐をしてくれるパートナー、ハルナを学ランの胸ポケットに

入れる、・・・というか押し込む？

「いつそいで学校ダー・・・！！」

自転車を全力でこぐ、冬場の登校は朝がともつらい、おきれないから。

だからこの寒さはだいぶ目を覚ませてくれる。

家から学校までは40分、自転車をかつ飛ばせば20分でつく。

と、言うわけで前半はかつ飛ばし後半の途中で朝食を買う、そしてあとは

普通に登校する、これがベストだな。

「いつそぐぜええええ！！」

ペダルに力を入れた瞬間！

「ご主人様！前！！！！」

「へ？」

ハルナの言葉で前を向いた。

突然、視界が動転した、腹部に刺激が走り、何か暖かいものが体から流れている、

っていうか目の前のぶつかった男性が何か握っている・・・

アレは・・・ナイフ？

「ご、ご主人様！？大丈夫ですか？！！」

「へ？・・・う、うん・・・まあ」

呆然と体にあいた穴を見つめる俺、その穴から赤い何かがどくどく流れている。

男はわけの分らない言葉を放ちながらダッシュで逃げた。

見てみれば男性が通ってきたと思われる道に女性が倒れている！？

「ちょ、すみません！大丈夫ですか？」

体にあいた穴を押さえながらその女性に歩み寄る。

まだ頭は真っ白だ、状況が理解できない・・・。

「あ、あの・・・」

女性に手を乗せた瞬間、体の血液が冷たくなった、いや、そう感じた。

時刻は6：45、冬場のこの時間はまだ薄暗い、だけどわかる・・・この女性はうちと同じ学校の同じ学年だ、校章と制服がそれを教えている。

そしてこの女の子・・・腹部から真っ赤に赤い液体が流れている！

それを見た俺は、ようやく自分が何を見て何をされたのか、そして現在の彼女と自分の状況を理解した。

俺・・・刺されたんだ、あの男に・・・

だが、自然と痛みを忘れ、倒れている女の子に眼を向ける

「君、大丈夫？まってて、今救急車を・・・」

ケータイを取り出し番号を襲うとした瞬間、体から一気に力が抜けた。

（あれ？手の感覚が・・・無い？）

腕はある、だけど・・・かなり青白い

（まいったな・・・この子だけでも助けないといけないのに）

彼女に覆いかぶさるように倒れた俺はその頬に彼女の息がかかるこ

とを確認する。

（よし、まだ息はある・・・）

「ハルナ・・・」

「は、はい!!」

「110番だ、警察、あと救急車も頼んで・・・」

「え？で・・・でも」

「早く!!」

ハルナの反論を言わず警察と救急車を呼ばせる。

「君、大丈夫だよ、もうすぐ助けが来るから!がんば・・・って・・・」

最後まで言えたか、わからなかった。

そしてそれが届いたのかさえもわからなかった、ただからだの感覚が薄れていく

「ご主人様!? マスター! マスター! - - !!」

ハルナが俺の頬を必死にたたく、だけどそれもあまり感じない。
どんどん意識が遠ざかっていった・・・。

『・・・ま!・・・じんさま!! ご主人様!!』

ぼやける視界で必死に俺の名前を呼ぶ声が聞こえる、

「は・・・る・・・な?」

「はい! ご主人様! 目を覚めました!!」

その言葉で頭が目覚める、だけど視界がまだぼやける

目を何回かパチパチまばたきして司会を正常に戻す。

「ここは？」

「はい、病院です、ご主人様と女の子は無事、生きてます」

「いや、俺が生きてるのはわかってるんだ、あの子は？」

「はい、腹部の傷はちゃんと跡も残らないそうです、あと少し遅かったら

出血多量で危なかったと先生が」

「へえ・・・俺は？」

「生きてたのが奇跡だそうですよ、ご主人様」

「ぶうつー!!」

飲んでいたアクエリアスを吐き出す、口の周りがべたつくなあ・・・

「ご、ご主人さま！？大丈夫ですか!？」

ハルナがタオルで拭いてくれる、そういえば・・・腕の感覚がちゃんとある・・・

「俺、どういう状態だったの？」

「えーつとですね、思いっきり腹部を刺され心臓の近くに刺さっていて

逆にその状態で一定時間活動していたこと自体が不思議なほどらしいですよ」

「どういっしょうたいさ・・・」

頭の血の気が引いていくのがわかる、俺ってそんな状態で女の子助けようとしたのか・・・

「それに、腕の感覚がなくなったのは血の出しすぎです、今輸血してまずけど」

そういわれてみれば腕がなんかチクチクする・・・
腕を見ると点滴と輸血、両方同時に行っていた。

「うっわ・・・っあ、犯人は？」

「それがマダ・・・何の目的で二人に襲い掛かったのかもわからない状況で」

「通り魔？」

「かもしれませんが、と、とにかく！今は私がご主人様をお守りするのです！」

そう言いながら胸を張るハルナ、俺はいったん考え

「よし、ちよつくら助かった子に挨拶でも行ってくるか」

「っあ、なら私も・・・」

「いや、ハルナはここで俺の私物を見守っててくれ」

「え？でも・・・」

「流石に病院じゃ襲われたりしないよ、それじゃあ待ってて」

ハルナに手を振り病室を出る、途中看護師に部屋番号を聞いてその部屋に向かった。

（やっぱり、輪廻さんか・・・）

プレートに書かれているのは輪廻 瑠璃、同じクラスの

内気な女の子、ちよつと大きな眼鏡をかけていてよくずれちゃうらしく

眼鏡をよく直す女の子、と自分の中ではイメージされている・・・。

長い前髪とは対照的に後ろはそこまで長くなく、首筋辺りまでの長さだ。

前髪は目元が隠れるくらいで眼鏡＋前髪でしかも常にうつむいた状態なので

彼女の顔を見るということは少ない・・・。

（でも、結構可愛い顔なんだよね・・・）

一度だけ見た事がある、彼女はクラスで浮いていて

不良きどりのやつ等のターゲット、そのときに一度だけ見た事があるんだ。

とても整った顔立ちで俺は思わず赤くなってしまっただけに。

（でも、今回はナンパじゃなくて心配なんだよね・・・）

とりあえず、彼女の話も聞いておきたい、そう思った俺は彼女の病室のドアを開けた。

第1話 通り魔（後書き）

はい！キャラクター設定で鈴木さんから宮野さんにかわったのわかりました？

いや〜こういうキャラなら鈴木さんもいいんですけど

へらへらキャラなら宮野さんの紀田正臣もすてがたいなあ〜ってw

w
w

まあそんなことはどうでもいいですよねw w w

第2話 あの人

『お前暗いよね』

『マジ回りも暗くなるからさア、消えてくんない？』

『一人じゃ何も出来ねえ癖によ』

私に浴びせられるのはいつも罵詈雑言、私はそれでもかまわないと思っていた。

気がついたら周りの人と話すのが怖くなっていた、原因はわからない。

わかりたくない、怖かった。

（やっぱり私は誰とも話せないのかな・・・）

仲良くなりたい、せめて。人なりに恋とか友情とか・・・。

だけど私の周りには誰も居ない、やってくるのは怖い人ばかり・・・そんな時、彼女が居た、私の神姫、ツガル型のマイだ。

彼女は私の話をずっと聞いてくれた、悩みの相談も乗ってくれた。

彼女は裏切らない、だからもう淋しくない。

そうおもっていた・・・。

『お前さ、もう死ねば？』

ある日、同じクラスの怖い人にそういわれた、周りの人はその人に恐怖を抱いていたので何も言わなかった。

そして私は、彼女に相談した、だけど、彼女はまっすぐに
「死ぬ必要なんて無いわ、むしろあいつらが死ねばいいのよ」
そういつて笑いかけてくれた。

だから私は、怖い人たちから避けるために、何も言わなくなった。
もともと口数が少ないと思っていたのでそれほどまで効果は無い。
ハジメはそう思っていた、だけど、怖い人は一時私に何か言葉を投げかけ
飽きたのか去ってくれた。

初めて勝てた、それがつい最近の話、そして、今日もこの調子で頑張る。

そう思っていた、だけど、誰かにおなかを刺された。

その人は『俺は悪くない、俺は悪くない・・・』

そう呟いておなかに刺さったものを深くに差し込んだ、
そしてそれを一気に引っこ抜いて逃げた。

痛かった、苦しかった、辛かった、助けてほしかった。

だけど、そんな矢先に

『ご主人様！前！』

『へ？』

ぼやけていく意識の中で、その男の人がまた一人男の子を刺した。
そして、驚いたことに彼は私に気付き、私に近寄ってきた。

（どうしてこっちにくるの？私に何をするの？）

体の痛みが何も出来ないことを確信させ、この後に自分が何をされるのか

怖かった、だけど、彼は

『ちよっ、スイマセン！大丈夫ですか！？』

私の肩に手を乗せて聞いてきたのだ。

私は驚いた、何でこの人は私に声をかけるの？
何でそんな怪我で私を心配できるの？

そんな思いが私の頭を駆け巡った、そしたら急に体にわずかな重みを感じた。

彼が倒れたのだ、さすがにもう体が限界だったのだろう。

私は声をかけようとした、だけど、痛みで呼吸しか出来ない。
そんな彼は私が意識を失う前にこういったのだ。

『君、大丈夫だよ、もうすぐ助けが来るから！がんば・・・って・・・』

彼は最後の最後まで私を心配してくれたのだ。

「・・・ん・・・う・・・」

目が覚めた、私の視界にはマイがいる

「もう、マスター・・・心配かけさせないでよ・・・」

最初は強がっていたマイだったが次第に感情が表に表れたのだろう、
涙を流しながら私の膝をたたく。そんなとき

「ホントに、心配させないでくださいよ」

「ひゃあー!!」

自分でも驚くほど大きく驚いた、そこには私を心配してくれた彼がいた。

彼は私の反応を見ると小さく笑い

「ははっ、そんな声初めて聞いたよ、大丈夫？」

そういいながら私の顔を直視する、なんだか顔が熱くなってきた。

「は、はい、助けていただいてありがとうございます」

「ははは・・・って・・・、気にしないでよ、同じクラスなんだしさ」

「え？」

驚いて顔を上げる、同じクラス・・・？

「あれ？覚えてないの？ひどいなあ、俺は蒼神 恭、君と同じクラスなんだよ」

そっついながら笑ってくる蒼神くん。

「ご、ごめんなさい、私・・・あまり人と関わらないからその・・・覚えてなくて」

本当に申し訳なくうつむく、目の端に涙が出てきた。

すると、それを蒼神くんがぬぐってくれた。

「女の子の泣き顔を見るのは趣味じゃないなあ、どうせなら助かったんだし笑おうよ」

「ぐす・・・はい、あれ・・・マイは？」

気がつくともマイが居なくなっていた

「ああ、神姫かい？俺の病室にいつてもらったよ」

「え？」

「俺の神姫も病室だからさ」

そっいつて笑う蒼神くん、だがその顔は少し青かった

「きず・・・痛むの？」

私は彼の押さえている腹部をチラッとみる

すると、少し血がにじんでいた。

「ち、血が出てるよっ!」

慌ててナースコールを押そうとしたその手を彼がつかむ

「大丈夫、かるーく傷が開いただけ、まだ大丈夫」

「ほ、ホントに?」

「ああ、それより自分の心配をしなよ?もうちょっとで手遅れになるところだったんだから」

「ほ、ホントですか?」

「らしいよ」

はぁ・・・、私はこみ上げてきた二酸化炭素を一気に吐き出し
彼を見る、蒼神くんが助けてくれなかったら今頃私・・・死んでた
のかな・・・

そう思うと急に怖くなってきた、体が冷たくなり、手足が震える

「だ、大丈夫?」

蒼神くんがそんな私の肩に手を乗せる、そこで私は
思っていた言葉を言った

「あ、蒼神くんは私のことなんとも思わないの?」

「え?」

「だ、だって、私いじめられてますし・・・蒼神くんまでこんな怪
我しちゃって」

だんだん目頭が熱くなっていく

「こんな女に関わってもなんとも思わないの?嫌がらないの?怖く
ないの?」

それを言い切ったとたん目から涙が止まらなかった

どどん出てくる涙のせいで彼の表情がよく見えない。

もうホントに私はだめだ、気持ち伝えるのが上手くない。

彼だってあきれる、せつかくマイ以外の人と話せるようになったのに・・・

と、そこまで思いつめたとき、頭に何かが乗った

「ひつく、っひく・・・え？」

それは彼の手でありその表情は笑っていた

「やだなあ、これは偶然だよ？」

「え？」

彼は笑顔を崩さずにこう続けた

「これは偶然、偶然君が刺されるところに遭遇して僕も偶然刺された」

彼はポケットからハンカチを取り出し私の涙を拭いてくれる

「それに、クラスの事だって偶然君が暗かったからって理由でバカ共が絡んできた」

そして、涙を拭き終わると私のベッドに腰掛けて私をちよくしする

「さて、ここまでで気味が悪いところは何にも無い、悪いのは偶然さ」

「偶然・・・ですか？」

「っそ、そしてそれに気付けなかった俺達も十分に悪い」
そっいつて頭を下げた蒼神くん

「ごめんね、輪廻さん、俺達が手早く君を助ければ
こんなことはおきなかったかもしれないのに」

「い、いえ！大丈夫です、慣れてますから」

手をぶんぶん振って慌てて対応する、そして彼はその手を握り締めた

「っへ？」

まっすぐな目で、優しくそんな口調で彼は口を開いた

「大丈夫、今度は俺が君を守ってみるよ、出来る限りね」

「え？ええ！？」

「ははっ、だーかーらー」

彼は私の耳元に顔を近寄せて

「今度からは俺が、バカ共から守ってやるよ……ってえ……」
それこまで言うとは彼は私に向かって倒れ掛かってきた

「あ、蒼神くん？」

彼の表情はとても辛そうだった、腹部には血がものすくくにじんでいる。

「か、看護師さん！！来てください！！蒼神くんが！！」

数分後、彼の容態も安定し、麻酔で眠りについたと先生に言われた。
そして、その日の夜、私は眠れなかった。

（暗い私を守る……守ってくれる……って……）

不思議とその言葉は、私を心のそこから安心させてくれた。
なぜだかわからない、彼も傷が開いてしまっまでどうして私のそばに居てくれたのか……

突然顔が熱くなっていくのを感じ、急いで布団にもぐる、傷が痛むが

それどころではない、私を守ってくれる・・・私を・・・

その安心感が、傷の痛みを忘れ安眠させてくれた。

第2話 あの人（後書き）

はい、今日はねたをかいていたのでぶつとつしで更新です

いやーなぜに彼はあんなキザ行動をとったのだろうね

怪我をしておかしくなったのかな？www

その真実は・・・次話くらいに明かされると思う・・・たぶん

第3話 怯える瞳

（・・・ん？どこだ？ここは）

気がつくとも目の前にあるのは病室の天井。

（あれ？輪廻さんの病室にいたはずじゃ・・・）

正直な話し、俺はあの時どんな会話をしたのか覚えていない。

彼女が目覚めるまで彼女の神姫であるマイと会話をして、

途中傷が痛み始めたが、血も何も出てなかったので気にも留めなかった、

だけど・・・俺は彼女に何を言ったのか覚えていない。

（俺は前から彼女のことを知っていた、いや、ただ傍観していた）
だからなのか、鮮明に覚えている台詞がある。

『俺が守ってやるよ』

この台詞は俺が彼女に言ったものであり彼女もそれに答えてくれた。
恥ずかしいのだが嬉しい、そんな感情が俺の中に芽生えた。

（だけど・・・あの目は・・・）

まだ覚えていることがもう一つだけある

それは、あの怯えた瞳・・・

その瞳は何も信じていない、というよりは信じたいけど信じられない・・・

そんな瞳だった。

（あんな目で見られたらなあ・・・たぶん無意識に言っちゃったんだろうな・・・）

傷のせいで瑠璃が目覚めて以降は頭がボーっとしたままで

何を言ったのかはつきりとは覚えていない……。

（だけど、言っちゃったんならしょうがない、ちゃんと守ってやるよ）

俺は決心した、この先、クラスのバカ共や件の通り魔がまた瑠璃を傷付けようとするなら……俺はそれと徹底的に戦ってやる。

（さて、ようやく体は動くようになったかな？）

体は先ほどまで痺れており、動かすことが困難だった、もう時間は立ったし……

「よ……こらっしょ……」

力を入れるもちよつとなさけない声を上げ
何とか座る体勢になる。

「さて、これからどうしようか……」

手元を見ると先生から『絶対安静！』との書置きが。

「こりゃ輪廻さんのところにいけそくに無いな……」
ため息を吐いたそのとき

「そんなことないですよ……」

「どわあ！？り、輪廻さん？」

突然横から声がしたので驚き声の方へ首を向ける。
そこにはまだ入院着の輪廻　瑠璃がいた。

「ど、どうしてここに？」

「あの……私からお願いしたんです、同じ通り魔の被害者だから不安で……その……一緒にいたいと……」

恐らく頬を染めているのか？顔が前髪で隠れていてしかもうつむいているので

よくわからない・・・だが、状況はアレか、『同じ被害者同士不安だから一緒にいさせてください』

と、これを担当医に言っただけでいいのかな？

「担当医の先生も同じ先生ですし・・・その、迷惑じゃなかったら・・・同室でも」

「いや、俺は迷惑じゃないのだけど・・・輪廻さん大丈夫なの？俺、とりあえず男なんだけど・・・」

いくらけが人でも年頃の男女を同室にするか？普通はねえよ。

だが、瑠璃は顔を上げ、真っ赤になっている状態で続けた

「あの、大丈夫・・・です、蒼神くんがそれでよければ・・・」

「そ、そうっすか」

若干引きつった笑みのまま布団に再度もぐりこむ

傷かチクリと痛んだがあまり気にしない、女の子と同室って・・・普通にヤバイだろ、なんつーか色々。

（でもまあ、この状態なら見舞いと乗じた嫌がらせも出来ねえか・・・）

などと無駄な心配を重ねたまま一度起き上がる。

「さてと、輪廻さんはドンくらいで退院？」

「え？・・・えと、2〜3週間だそうです、処置が早くて」

「俺と同時期だね、って当たり前か、あはははっ」

出来る限り話題を守ってこようとしたのだが以外にもすぐに終わる。
(やべえ、会話をつなげないと・・・)

と、そのとき瑠璃から口を開いた。

「あの、蒼神くん」

「はい？」

「えと・・・蒼神くんって好きな人いますか？」

「いないよ」

その問いに迷いもなく即答できる俺、
もどつかと思うのだが実際いないのだから仕方がない。

「なら、輪廻さんは？」

笑顔を崩さぬまま瑠璃に問いかける。

瑠璃は一度こちらを見た後顔を真っ赤にしてうつむく。

「好き・・・かどつかはわかりませんが・・・気になる人なら、
います」

「そつか、その人に振り向いてもらえるといいね」

笑顔で瑠璃にそういった俺、いや、心のそこからそう思うよ、
女の子の幸せそうな顔は可愛いから、ハルナには負けるけど。

瑠璃は真っ赤にしたまま「はい・・・」と呟いた。

「さて、これからは大変だね、輪廻さ・・・」

「あの！」

と、瑠璃が今までに無い大きな声で俺の台詞をさえぎった。
「なに？」

「えと・・・私のこと、瑠璃って呼んでください」

「え？」

急に女の子に名前を呼べといわれた。

驚き、って言うよりも不思議とその言葉を待っていたかのように思えた。

「わかったよ、喜んで呼ばせてもらうよ、瑠璃」

笑顔のまま彼女の名前を呼ぶ。

すると瑠璃は

「ふ、ふにゅゅ・・・」

と、真っ赤になって布団に倒れこんだ。

（意外と忙しい子だなあ）

それをぼんやり見つめていた俺、そして、ふと脳裏に浮かん

だあの男のナイフをもった姿。

（結局あの男はなんだったんだろう・・・）

警察も結局まだ搜索中としか教えてくれず、真相は闇の中。

（だけど、通り魔ならまだこの近くをうろついてるはず）

一人で立ち向かうことほど危険なものはない。

だが、俺は決めたんだ、彼女を守ると・・・そのためなら、不安要

素は無いほうがいい。

（一度口キに頼んでみるか）

高校入学当初からの友人で情報通である咲神 拓樹に頼んでみることにした。

メールを送り、時計を確認する。

「もう寝るか」

時刻は11:09、眠る時間にしては丁度いい。

俺はゆつくりと布団に入り、一度瑠璃を見て、電気を消した。

第3話 怯える瞳（後書き）

はい、学校が始った黒猫でーす

さて、k t k rなイベントも無いまま始業式が終わりましたw w w
さて、それじゃあ今日はこれまで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3616ba/>

武装神姫～人と機械の恋物語～

2012年1月10日20時47分発行